



## 学校教育目標

☆ともに学ぶ生徒

☆こころ豊かな生徒

☆ともに鍛える生徒

### 熊谷の子どもたちは、これができます！

「生きる力」= 学力・体力・やる気

- ㊦ 朝ごはんをしっかり食べる。
- ㊧ 呼ばれたら「はい」と元気よく返事をする
- ㊨ 「ありがとう」「ごめんなさい」と言う
- ㊩ 友だちをたくさんつくる。

### 「3減運動」

- ・テレビの時間
- ・ゲームの時間
- ・携帯電話やパソコンの時間



### 増やします！

- 家族との会話
- 予習・復習の時間
- 読書の時間

大人が手本となって



## 人権について考える

毎年、12月4日から10日まで人権週間です。この期間に、学校では人権について改めて考えます。今回私は、東京パラリンピックを通して人権について考えてみようと思います。東京で開催されたこともあって、とても興味深く観戦していましたが、その中で考えたことが2つありました。

1つは、選手の生き方や努力についてです。パラリンピックでは生徒の皆さんと年齢の近い10代の人も多く活躍していました。その中の一人に山田美幸さんという中学校3年生の選手がいます。山田さんは生まれつき両腕がありません。また、両足の長さも違うそうです。5歳のころから水泳を始め、水泳が大好きになり、選手として頭角を現すようになってきました。両腕がないため、足のキック力を生かした背泳を続けてきました。パラリンピックの出場を夢見て努力を重ね、ついに銀メダルを獲得しました。

また、バドミントンで活躍した梶原大暉さんは、19歳の大学生です。中学校2年生で交通事故に逢うまでは、野球に打ち込み、ピッチャーとして活躍していたそうです。怪我のため車いすの生活になりましたが、バドミントンに出会い、野球での経験を活かして力強く打つことができます。世界の強豪を破り、見事バドミントン男子シングルで金メダルを獲得することができました。

二人は、自分の体をよく理解し、工夫しながら競技に挑戦していました。その姿はとても堂々として、テレビなどでは華々しく活躍する様子を伝えていました。しかし、自分の障がいを理解し、スポーツに挑戦しようと決意し、大会に参加するまでの力をつける努力はどれほど大きなものだったろうと考えました。

多くの選手を見て感じたのは、自分の障がいに応じて、自分の良さを生かして競技に挑戦していて、障がいがあってもそれを特別なこととしていないことです。当たり前のことです。障がいがあってもなくても「すべての人は、人と違う部分がある。」のです。違いがあることを受け入れて、「あれがない、これできない。」という前に、自分が置かれている立場で自分ができることは何かを考える、前向きな気持ちを持っています。誰もが目標を持ち、力を伸ばせるよう努力するチャンスがあるのだと思いました。

2つめは、共生社会についてです。私は、パラリンピックの歴史や社会の変化にも興味を

持ちました。日本でパラリンピックが開催されるのは二度目です。1964年、今から57年前のときは、日本代表選手は、療養所などの患者さんなど53人で、仕事をして社会参加していた人は少なかったそうです。「共生社会へ一歩踏み出す。」これが、その時に残されたことばです。

その後、もう一度日本での開催となり、2021年のパラリンピックでは、参加国も参加選手の数も大幅に増え、障がいのある人を取り巻く環境も大きく変わりました。さらに、パラリンピックをきっかけに、日本ではバリアフリー法という法律の見直しがあり、施設、設備の改修が促進され、障がいのある人の移動の円滑化が図られました。

同時に今大会では、「心のバリアフリー」を広めることが、大きな目標となっていました。「心のバリアフリー」とは、様々な心身の特性や考え方を持つすべての人々が、相互に理解を深めようとコミュニケーションをとり、支え合うことです。

まずは、自分とは違う状況にある人、障がいのある人にとって、どんなことが困りごとであり、つらさを感じているのか想像してください。そして、その人たちが、どうしたら生活しやすくなるか。自分たちはどう接していったらよいのか。今の自分にできることは何か、考えていきましょう。

## ふれあい講演会(11月22日)「夢に向かって努力すること」



ふれあい講演会では、埼玉武蔵ヒートベアーズの宮之原 健選手に「夢に向かって努力すること」をテーマにご講話いただきました。「プロ野球選手になりたい。」という夢に向かって、学生時代から努力してきたこと、またプロ野球選手になっても鍛錬を欠かさないことなど、生徒にとって自分の学校生活や進路、職業を考える上で大変参考になるお話でした。